

S E N - O K U

現代鑄金作家 × 中国古代青銅器

2 0 2 3

共 鳴

Re - s o n a t i o n



梶浦聖子 平戸香菜 杉原木三 久野彩子
上田剛三 矢直矢本 山ひろ子 柴田早穂
佐治真理子 石川将士

同時開催…青銅器館「中国青銅器の時代」



泉屋博古館

M H S E N O K U
M U S E U M
M O K U A N

聲

〔休館日〕月曜日(9月18日、10月9日は開館)、9月19日、10月10日 〔開館時間〕午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

〔主催〕公益財団法人泉屋博古館、住友グループ各社、京都新聞

〔後援〕京都市、京都市教育委員会、京博連、公益社団法人京都市観光協会 〔助成〕芸術文化振興基金

2023 9/9 sat. - 10/15 sun.

泉屋博古館 展覧会プレスリリース 2023.7.15

泉屋ビエンナーレ2023 Re-sonation ひびきあう聲

展示会期 | 2023年9月9日〔土〕～10月15日〔日〕

OPEN | 10:00 - 17:00 ※入館は閉館の30分前まで

会場 | 泉屋博古館 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24

入館料 | 一般800円 高大生600円 中学生以下無料

休館日 | 月曜日 (9月18日、10月9日は開館) 9月19日、10月10日

主催 | 公益財団法人泉屋博古館、住友グループ各社、京都新聞

助成 | 芸術文化振興基金

後援 | 京都市、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、公益社団法人京都市観光協会

WEB | https://sen-oku.or.jp/program/2023_biennale/

展覧会概要

2021年に開催された第1回から早や2年、泉屋博古館の新たな取り組みである「泉屋ビエンナーレ」は新たな鑄金作家をメンバーに加え、第2回を迎えることとなりました。

約3000年前の中国古代青銅器からインスピレーションを受け、新進気鋭の鑄金作家10名が新作を制作、おなじ展示会場内に陳列することで、時空を超えた対話を体験いただける刺激的な空間を演出いたします。

はるか古代から連綿とつづく鑄金の技術はどこからきて、そしてどこへと向かっていくのか。

ひびきあう聲と聲のなかから生まれる、鑄金芸術の最先端をお見逃しなく。



泉屋博古館青銅器館第一展示室

企画趣旨

泉屋博古館が所蔵する中国古代青銅器コレクションは、質・量ともに中国以外では最も充実したコレクションとして世界的に高い評価を得ています。それらは単に貴重な古代の遺物というだけでなく、東アジア金属工芸の範として、後の時代の人々の創作活動を刺激してきました。

「泉屋ビエンナーレ」はこれら古代青銅器の高い技術や特徴的な造形にあらためて着目し、クリエイティブな芸術品と捉え直すことで、その魅力を再確認する展覧会として2021年よりスタートしました。

現代の気鋭の鋳金作家10名が泉屋博古館の古代青銅器と対峙し、古代青銅器から受けたインスピレーションをもとに手がけた新作を一堂に展覧します。特定の青銅器からイメージを醸成されたものもあれば、3000年という大きな時空のなかに自身を投下して制作されたもの、作家による視線の違いもみどころのひとつです。

青銅器に込められた古代の声を聴き「共鳴 (resonation)」することにより、中国古代青銅器がいま「再び」新たな創作の源となることを願い、「Re-sonation ひびきあう聲」としました。

中国古代青銅器と現代鋳金作家、時空を超えて共鳴する聲と聲を体感できるユニークかつクリエイティブな展覧会です。



梶浦 聖子

KAJIURA Seiko

東京都出身
ハクビント 鑄造工房主宰

《地上から私が消えても、青銅》

坩堝から金属が飛び出すイメージが生まれたのは、過去と未来が逆さまだけど同じだとわかった時です。つまり、私が過去と対話して作っているということは、未来の誰かも私が作ったものと対話しているということでもあるのです。そのように考えた時、金属を入れて溶かすための坩堝は、いろいろな形の金属を放出するための装置になるのではないかと思います。

柴田 早穂

SHIBATA Saho

大阪府出身 5歳より小豆島で育つ
小豆島で活動中の鑄金作家



《空白の肖像 古代青銅器と人々》

古代青銅器が繁栄した時代の大きな歴史観のなかで埋没してしまっている〈そこに存在していた〉であろう人々の姿に眼差しを向けました。青銅器に残された痕跡や発掘された道具から制作工程をイメージし、当時のつくり手の姿を想像することからはじまり、これまでに明らかになってきた青銅器の祭器としての用途や刻まれた金文から人々の思想や時代背景を理解しようと努めました。

佐治 真理子

SAJI Mariko

神奈川県を拠点に
工房「コの字製作所」を主宰
鋳物作品の制作を行う



支占（かゆう）殷後期



有翼神獸像（ゆうよくしんじゅうぞう）戦国前期

《よりしろ》

古代青銅器にはフクロウ、ミミズク、ゾウ、ウサギ、虎やその他空想上の動物など様々な動物の形がみられます。

動物が霊力をもつという信仰から、殷代の祭器であった青銅器に現れた動物たちは、神意を伝える仲介的存在であったとも考えられています。

滑稽ささえ感じる造形は、人々の信仰と祈りの強さに加えて、作り手のひたすらに真面目な「作りきる」という信念のような意志を感じ、畏敬の念を抱きます。

犧首方尊（ぎしゅほうそん）殷後期



三矢 直矢

MITSUYA Naoya

東京都出身
東京で活動中の彫刻家



《Prime Goal》

この犧首方尊という青銅器を図録で初めてみたときに単純にその形や佇まいの美しさに惹かれました。実物を観ると、全体の幾何学的な形状に合わせて紋様や動物の位置も整理され、計算されていることがわかりました。その印象を元に隙のない立体物を作ろうと思い、正四面体をメインにすることにしました。正四面体というのは同じ長さの辺からできているどこからみても終わりのない立体で、辺の数も少ないためか完全な幾何形体と考えたときに真っ先に頭に浮かびました。

石川 将士

ISHIKAWA Masashi

東京都出身
富山大学学術研究部
芸術文化学系
助教



《種》

古代青銅器の表面に施された饕餮文からは禍々しいほどの生を感じることができる。蟠螭文や鱗文などの装飾的な文様に変化していった後も、そこには生命の形がはっきりと残されている。世界が移ろいゆく中で、結局のところ私が生という現実を最も現実的に感じるのは家庭の中だけだ。

人という種（しゅ）の記録であり、表現には満たない種（たね）のようなものができた。第4次産業革命、人々は実態のない、物質のない世界に近づいていく。人一人、今私はここにいた。

本山 ひろ子

MOTOYAMA Hiroko

千葉県出身
千葉で活動中の鑄金作家



《pair》

3000年という時間を聞いて、私は想像する。

今を真ん中に考えて、過去の3000年、この先の3000年

現代に生きる私たちは、職人たちが作った青銅器が3000年経っても生きていることを目撃している。

私は想像できない。3000年後に果たして、自分の作った青銅作品が生きていられているかを。

できることは、今日の感動を形に残すこと。

上田 剛

UEDA Tsuyoshi

奈良県出身
金沢美術工芸大学工芸科 講師

《 artifact 》

私が作品制作において活用する金属の着色技法は、上から絵の具や染料を塗ったりするのではなく金属の腐食作用を用いて金属の表面を錆びさせて変色させる方法である。この金属着色技法には様々な方法や効果があるが、特に薬品や熱を使って人為的に美しい青や緑の錆を発生させる着色方法は、古代青銅器の表面を再現し骨董趣味を満たすために開発されたものではないかと考えている。鳥蓋瓠壺に色を塗った愛玩者も、この青銅器の古美をより強調するために、人為的に緑青を再現しようとしたかもしれないと想像できる。



鳥蓋瓠壺（ちょうがいこ）戦国前期



虎鐃（こはく）殷後期

杉原 木三

SUGIHARA Mokuzo

宮崎県出身
三三鑄金工房主宰

《 猫鐃 》

出来上がった作品を叩いて音を響かせた。何度も叩いてその音を聞いているとお腹が空いてきた。もう一度、泉屋博古館で青銅器を観たいと思ってしまった。当時はどのような鐘の音を聞いたのだろうかと3000年前の青銅器を作った工人達に思いをはせ、また、もし3000年後この作品が残り、それを観た人がこの鐘はどのように作ったのか、何を考えて作ったのかなどと問いを巡らしてもらえることを願い制作した。



久野 彩子

KUNO Ayako

東京都出身
東京で活動中の鑄金作家

《 time capsule 》

どのような想いを込めてこの形になったのか、作られた当時はどのような風合いだったのか、剥落してしまった象嵌の円渦文はどのような感じだったのか・・・ 当時のことについては知る術はなく、推測することしかできない。どれほどの後世に残しておくことを念頭に制作されたものかも定かではないが、この彝器の存在自体が現代に残されたタイムカプセルのようだと感じた。



円渦文敦（えんかもんたい）戦国前期



羽文盃（うもんあん）前漢末～後漢



平戸 香菜

HIRATO Kana

茨城県出身
富山で活動中の鑄金作家

《 こぼれ落ちる祈り 》

文様には人の祈りが込められていると感じた。

昔も今も、人は自分を越えた力を持つ存在を信じて祈るという行為を行う。

そしてその祈りはしばしば届かない。

手のひらから水が漏れていくように、花が散るように祈りがこぼれ落ちていくことを私たちは知っている。

それでも私たちは祈る。

自分ではない何かに向けての祈りは、もしかしたら他でもない自分自身を信じて生きていく為の行為なのかもしれない。



*別途入館料が必要です。

EVENTS

9月9日（土）アーティスト・トーク

第一部 13：30～ 上田 剛、梶浦聖子、久野彩子、平戸香菜

第二部 15：00～ 佐治真理子、柴田早穂、杉原木三、本山ひろ子

定員各回40名 会場：講堂

9月23日（土・祝）ワークショップ

「金属を溶かしてつくる！オリジナル錫チャーム」 *要予約（先着順）

講師：佐治真理子／柴田早穂

時間：（1回目）10：00～、（2回目）14：00～、 定員各回10名

参加費：2000円

会場：講堂

10月7日（土）ワークショップ

「中国古代文字－金文－を作ってみよう！」 *要予約（先着順）

講師：杉原木三／梶浦聖子／本山ひろ子

時間：（1回目）10：00～、（2回目）14：00～、 定員各回15名

参加費：2000円

会場：講堂

*ワークショップ受付開始：8月21日（月）11時～ 電話075-771-6411または当館HPにて

割引情報

相互割引「京都東山 美術館さんぽ」

本展の半券呈示で下記展覧会の一般入館料800円が100円引きになります。

※お一人様につき1枚の半券が必要です。その他の割引との併用は不可。

【野村美術館】「茶碗－茶を飲む器の変遷と多様性－」

8月26日（土）～10月9日（月・祝）/10月21日（土）～12月10日（日）

本展覧会をご紹介くださる媒体に画像をご提供いたします。

次頁の広報画像一覧からお選びのうえお申込みください。

※お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。

※情報確認のため、お手数ですが校正原稿を当館へお送りください。

原稿確認を行わず誤った情報が掲載された場合、当館では責任を負いかねます。

※広報用画像の掲載には、各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※アーカイブのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。

※作品の画像を1点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展招待券を

読者プレゼント用に提供いたします。招待券希望枚数を明記してください。

「泉屋ビエンナーレ2023 Re-sonation ひびきあう聲」広報用画像一覧



《猫鑄》
杉原 木三



《time capsule》
久野 彩子



《artifact》
上田 剛



《地上から私が消えても、
青銅》梶浦 聖子



《空白の肖像 古代青銅器と
人々》柴田 早穂



《種》
石川 将士



《こぼれ落ちる祈り》
平戸 香菜



《pair》
本山ひろ子



《Prime Goal》
三矢 直矢



《よりしろ》
佐治真理子

●御社基本情報

媒体名 (URL) :

発行日/放送日 :

御社名 :

ご担当者名 :

電話・FAX・E-MAIL :

●招待券希望枚数 : 5組10名 10組20名 ばら (枚)

(送付先住所 :)

〔問い合わせ先〕 泉屋博古館 広報担当課長 坂井さおり pr-kyoto@sen-oku.or.jp

担当学芸員 山本 堯

〒606-8431 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24 電話 075-771-6411 FAX 075-771-6099